

「閨」一句鑑賞

守屋 明俊

(五十音順)

杏色のアストンマーチン夏はじめ 橋本 恭子

アストンマーチンは英国を代表する高級スポーツカー。何より美しく機能的で、映画ではジェームズボンドの「ボンドカー」としても登場している。ボディカラーはグリーン系、レッド系、ブルー系など豊富だが「杏色」はアストンマーチンのイメージとしては異色。作者はそこに目を止め、夏の始まりを実感している。

朴の花一夜の雨に寂びにけり 長谷川菊男

朴、白木蓮、泰山木。どの花も時間が経つうちに白さが衰え、寂び色に変化する。殊に、高さ十メートルを越える朴は梢の頂に咲き見事に香るが、茶色に褪せ、やがては落ちる。この句の「一夜の雨に寂びにけり」の趣である。「寂び」は作者の心情・美意識から発せられたもの。(示寂すといふ言葉あり朴散華 高浜虚子)

チュルチュルと呑み込まれゆく蚯蚓かな 長谷部幸子

蛭螂が蟻螂を啜えている現場を見て、それをどう詠もうか苦心したことがある。掲出句の蚯蚓は果たして何に

呑み込まれているのだろうか。その相手を明かさずチュルチュルと呑まれる蚯蚓だけに焦点を当てているこの句。本来は深刻で残酷な内容でありながら、その哀しみを超えた可笑しみを湛えている。「チュルチュル」は図らずも童心から出た言葉で、秀抜。

もたもたと丁寧であり新社員 畠山 奈於

老獪なベテラン社員とは異なり、新入社員は世馴れず初めの内はただもたと動く。時にぎこちなく馬鹿丁寧に見えることもあるが、本人たちは一生懸命。そんな新社員をこの句は祝福し、未知数の将来を温かく見守る。「もたもたと丁寧であり」の把握は魅力的。

柿若葉空き家いきいきしてをりぬ 浜田 優子

空き家とか廃屋の句を句会で多く見受ける。それだけ高齢化社会が進んでいるということだろう。この句ではその空き家を「いきいきしてをりぬ」と詠む。眩しいばかりの庭の柿若葉が、空き家を生き生きと照らす。主のない寂しい空き家が一変、明るさを取り戻した。

赤い薔薇見るたび思ふ赤い靴 原田ミチ子

横浜の山下公園。遠く海を見つめる「赤い靴はいてた女の子像」の周囲には赤い薔薇がたくさん咲いていた。

だから、この句には赤い薔薇と赤い靴が出てくる。「見るたび」は、野口雨情作詞『赤い靴』の「赤い靴見るたび考える」の「見るたび」。赤色は印象深い色なので何度も思い出すのだろう。童心に帰った作者。

結び葉の空気濃すぎて息できぬ 春田 千歳

結び葉は、木の葉が茂り、葉と葉が交わり鬱陶しく重なり合っている様をいう夏の季語。その鬱々とした葉の交わりを作者は「空気が濃すぎ」と感じ、また「息できぬ」と瞬時に詠む。橋本多佳子の「雄鹿の前吾もあらあらしき息す」に通ずるものがあり穏やかではない。

昼寝覚時間はだるま落しかな 平野 豊雄

達磨落しは、「数個の同型の木製の輪を重ね、その上に置いた達磨の人形を落とさないように小槌で打って輪をはずす遊び」（広辞苑）。昼寝をすると、起きている間よりもずっと早く未来へ行ける。覚えてみると、その時間の経つ速さに驚く。まるで小槌で打たれたかのように時間が外されるのである。そのために昼寝覚の直後は暫くぼかんとして動くことができない。なるほど。

黒南風や威風堂堂氷川丸 平野 美子

日本郵船氷川丸は「海に浮かぶ文化遺産」。昭和5年

に当時としては最新鋭の貨客船として竣工した。戦時中は海軍特設病院船だったが沈没を免れ、戦後は再び貨客船としてシアトル航路に復帰。昭和35年に引退し、現在まで山下公園の前に係留保存されている。掲出句はその氷川丸に敬意を表し「威風堂堂」と詠む。黒南風は波乱万丈であった氷川丸の歴史を思わせる。

母の日の母よりうまく焼くたまご 本多 遊子

自慢話ではない。お母さんご苦労様の心がこの卵焼きから滲み出ている。なまじ卵焼きが上手な母親より、苦手な母親の下で育った方が子どもとしては心が安らぐこともある。その母親の全てを受け容れているわけではないだろうが、こと卵焼きに関しては母の顔を思い出しながら、にこにこ顔で卵を割り入れ、うまく焼くのだ。

毎日が日曜今日は菖蒲風呂 持田きよえ

一年中毎日が日曜日の者にとつては、菖蒲風呂に限らず、退屈しのぎに薔薇風呂も牛乳風呂も歓迎である。作者も今日は今日で、菖蒲を買い求め湯に浮かべ満喫している。冬になれば「毎日が日曜日は袖子の風呂」という句が出来るかも知れぬ。菖蒲を買うのが面倒であれば今は菖蒲を粉にしたティーバッグのようなものも売られている。毎日が日曜日派には便利な世の中になった。

青嵐目のあをむまで佇めり 森尻 禮子

青嵐、青葉風。青が付くだけで嵐も何やら風情が出てきて、作者もその風を嫌がらずむしろ快く享受し立ち尽くしている。「目のあをむまで」は青嵐からの発想であり、技も少し見えてくるが嫌味はない。目だけでなく、心身ともに青んでいることだろう。

夏風邪や眼鏡重しと思ひつつ 山田 径子

いつもは何の違和感もなく掛けている眼鏡が、今日はちよつと重い。夏風邪か、そういえば眼鏡が重く感じられるだけでなく体も少しだるい。この句、下五が「思ひたり」でなく「思ひつつ」と、現在進行形になっていることに注目。夏風邪による作者のナーバスな、あるいはアンニュイな心境がうまく表されている。

極楽寺夏鷺のすき間なし 山田 雅子

鎌倉の極楽寺。花祭りは疾うに終わり、今は夏鷺の声で賑やか。天下を取ったかのような鳴き声に驚くことも。その賑やかな様を「夏鷺のすき間なし」と作者は表現するが、全くその通り。言葉が洗練されていて見事だ。

目を瞑り柿の葉鮎の香り吸ふ 横須賀智子

私のような老人が家庭で目を瞑ったまま食事をする

「気味が悪い」などと嫌がられるものだが、作者はそのようなことはあるまい。何しろ柿の葉鮎であるから、その柿の葉の香りを吸うことに誰もものを申せぬ。目を瞑れば、ああ香りを楽しんでいるのだわと周囲は好意的である筈。「香り吸ふ」と直截に詠んで思いが伝わった。

麦星や眠り剎那に兵士たち 和田 郁子

麦星は一番星としてよく見る牛飼い座の赤い星アルクトウルス。麦秋の頃に天頂で輝くことからこの名が付いている。その星の下では戦の最中、寝るに寝られない兵士たちがひととき貪るように眠る。それが「眠り剎那に」。この措辞を得るまでには相当の推敲を要したことだろう。兵どもは古今東西、戦剎那に眠り剎那に生き、死んだ。

空豆や親子三代恵比須耳 阿部 草薫

作者には、空豆を福耳に見立てた（空豆を二つ並べて福耳に）の佳句がすでにある。掲出の句はその続編で、福耳を恵比須耳として登場させ、その福々しい耳が親子三代続いていると詠む。空豆は阿部家の家紋みたいだ。

たんぼぼの黄のスタンプ野にぼぼん 伊澤やすゑ

「野にぼぼん」が「たんぼぼ」と和し、可愛い。「黄の」は「ぎーの」と読む。黄色いスタンプが野にぼぼん

と押されたタンポポ野が仄々と明るく楽しい。「ぼぼん」の語感はまだで鼓を打っているようで、そう言えばたんぽぽの別名は鼓草であった。

あかつきのけふの一句よ目高孵化 市村 啓子

天恵の一句とはこういうことかと教えられた一句。目高が孵化するように句は生まれるのである。祈つて句が出来たのではなく、暁の無欲の頭の中に天から降つてきたのである。俳句は授かりもの。今日の一句に幸あれ。

ガーシュインおたまじやくしの踊る池 牛込はる子

『ラプソディー・イン・ブルー』『巴里のアメリカ人』『ボーギーとベス』の作曲者として知られるジョージ・ガーシュイン。「スワニー」「サマータイム」「ザ・マン・アイ・ラブ」も彼の作品。そのガーシュインが牛込さんの句の中で大活躍。池のお玉杓子を「巴里のアメリカ人」よろしく集団で踊らせてしまったのである。早いリズムで踊るお玉杓子。ガーシュインの楽譜から生まれたのだから元気である。兎に角、面白い句だ。

缶ビール振つて空っぽ酔ひ足らぬ 内海 範子

缶ビールは飲み終ったあと指で軽く缶の腹を潰しておけば、後で缶を振ることもない。缶を振るのは或る程度

酔いが回ってきた証拠。錯覚し、缶を振り、空っぽと気付く。でも、下五「酔ひ足らぬ」にはまだ余裕が。

時を止め毀るるなかれ白牡丹 大下 壽櫻

牡丹の散る様は、例えば加藤楸邨の「火の奥に牡丹崩るるさまを見つ」のように「崩る」と表現することがある。ところが掲出の句では「毀る」と厳しく詠む。気品ある美しい白牡丹が人の目を止め、時を止める。その強大なパワーが牡丹自身を毀しかねないと思つた作者は「毀るるなかれ」と綴る。独特の把握である。

麦飯や野生の力しぼり出す 太田 裕子

麦飯が、作者の体に潜む本来の力をしぼり出してくれた。そう解釈した。正岡子規の『仰臥漫録』再読。明治三十四年十月三日の朝食に「麦飯三わん 佃煮 なら漬」の記載を見た。いつもは「ぬく飯」「粥」を食べているがこの日は何故か麦飯。前日、宿痾の横腹の痛みで涙ぐみながら昼食をとつた子規は夜鼻血を出すなど体調が悪化。麦飯を食べたその日も午後には精神的に「逆上」。翌日も午後には「叫びもがき泣き」の異状を訴えている。残念ながら麦飯の効果は一食だけでは無理だったようだ。でもその朝に限って麦飯を食べたのは、何らかの期待があつてのこと。翻つて、掲出句の麦飯。作者なら大丈夫。

若葉して気迫の大樹天を指す 小河原政子

若葉、気迫、大樹、天。どれも元気がよく作者の現在そのもの。漲る力が一句全体からほとぼしる。大樹だけでなく、人間もこうありたいと思わせる気迫の一句。

絵皿にも花描かれて宴かな 小野 直美

家に招かれての花の宴だろうか。そのために用意された調度品の数々。殊に絵皿には桜の花が描かれ興をそそる。壺には桜が活けられ、盃の酒もまことに美酒。心の和む宴であったことが「宴かな」から窺える。

降り出しもその後も知らず春の雨 金子かほる

水たまりから、さつきまで雨が降っていたと知ったのだ。白い雨滴のしとしと降る春の雨。「降り出しもその後も知らず」は、春の雨らしい様をうまく捉えている。

春惜しむ博多ラーメン食へに行く 金田 知子

「博多ラーメン食へに行く」の飛躍が面白い。「長崎ちゃんぽん」「喜多方ラーメン」「讃岐うどん」でも成り立つが、博多に余程の思い入れがあるのだろうか。

芽吹き野や磁石片手に奥深く 金田 喜子

「磁石片手」だから本格的な探索である。春を確かめ

に奥深く分け入った作者の目に、もろもろの芽吹きが鮮やかに広がる。素敵な冒険だったようで何より。

雨蛙 A I 困る 顔 認 証 北 好夫

面白い発想の句。A I が雨蛙の顔を認証しようとして困っている。そもそもこのA I には雨蛙の存在がインプットされていない。人間の様々な顔は深く認識できるが、雨蛙の顔は想定外。一瞬戸惑うA I の顔が見えるようだ。

飛車と角取り替へる声夕端居 木山 有衣

端居しているところへ、将棋を指す声が聞こえた。それは、大人に立ち向かう子どもの声。角より飛車の方が好きなのだろう、手持ちの角を飛車と交換してくれと談判している。可愛い一言の句。「夕端居」の抒情よし。

素粒子に春とか愁ひあるのかな 久保田勝一

素粒子という細かな目に見えない小さな物質。人間味は勿論ない。この句「レバニラに春とか愁ひあるのかな」でも面白いが、レバニラは目に見えるし重量感がある。菰は夏でありレバーは愁いに縁がなさそうだ。素粒子が春愁を感じたとして、それが自然界、素粒子論に影響を及ぼすのかどうか。作者から洩れ出する春愁の一句。

父と子の公園デビュー 街若葉 栗原 季星

ようやく子どもが外で歩けるようになり、今日はお父さんとの公園デビューだ。街若葉から郊外の公園の明るく若々しい彩が見え、この父子や一家のこれからの幸せも遠望できる。

無き知恵をしぼりきつても梅雨の闇 小坏あゆみ

いろいろなことに対処しようと無い知恵を絞るのだが妙案が浮かばない。心は梅雨の闇のようにどんどん暗くなるばかり。じとじとと梅雨は大きく深い闇を作り、作者はその闇を打ち破ろうと知恵を絞り続けている。

あぢさゐの見納めなれば焼きつける 小泉まり子

見納めなどと縁起でもない。五月、六月は体調の変化が起こりやすいというが、健康には是非とも留意していただきたい。紫陽花はまだまだ見られるし、来年も再来年も咲きます。

躓いた小石を叱る薄暑かな 幸喜美恵子

叱られた小石も驚いたことだろう。こんな小石に躓くなよと、ぼやいているかも。兎に角、句の設定が抜群。躓いた自分の不甲斐なさを嘆くのではなく、小石に責任転嫁している。「薄暑」で上手く俳句として納まった。

ソーダ水底を吸ふ音憚らず 小林ゆきお

憚らず、ずるずる音を出した経験がある。クリームソーダなどはアイスクリームの味を逃さぬよう氷の合間にストローを捻じ込ませ、ずるずる。作者はその音を聞いたのだろう。「底を吸ふ音」は五感を駆使しての写実。

神輿庫はきつちり閉まり樟若葉 斉藤久美子

佃島の住吉神社の神輿庫は硝子張り、立派な神輿を外から拝観できるが、大概の神社ではごつい鉄製。祭の前も後もきつちり閉じ、人をシャットアウトしている。故に、この句の樟若葉は一種の救い、息抜きとして、訪れる人の心を和ませてくれる。大きな樟なのだろう。

粲々と連翹の黄や朋来る 島 昌子

眩しいばかりの連翹の花垣。その光とオーバーラップして友がやって来る。その友の瞳の輝きも連翹に勝るとも劣らず。作者の目にそう映ったに違いない。その華やきが作者の心を前に押し出している。

野はうりずん土色の骨君の名は 嶋谷 宗泰

今回の作品はすべて沖繩慰霊の句。日本で唯一の地上戦が行われた沖繩を忘れてはいけない。本土防衛のための時間稼ぎで首里から本島南部へ撤退した結果、多くの

民間人が巻き込まれた。死者は米軍が約一万三千人、日本軍約六万四千人、沖縄県民約十二万三千人、全体で二十万人以上を失った。ひめゆり学徒隊をはじめ、県民の四人に一人が死んだ。そのような歴史を辿る時、掲出句の誰の骨だか判らない「土色の骨」にはつとずる。「うりずん」は沖縄の四月から五月の季節。その後「若夏の季節が来る。誰かが始めた戦。過ちを繰り返してはならない」という思いに満ちた作品群をこの度は拝読した。

億年の宙を引き裂き岩つばめ 清水 悠太

岩燕は多く山地の断崖に巣を造り、人家の軒にも営巣するという。その岩燕の飛び交う様をこの句では「億年の宙を引き裂き」と詠む。地球も地球の空も億年を優に超える時を経ている。岩燕もまた何世代にわたり生き続け、宙を引き裂いてきたのだろう。雄大な一句である。

空は海海は空なり夏来る 首藤 久枝

空は海のようにであり、海もまた空のようである。空は梵語で「くう」とも読むから、この句は何やら禅問答めいていて身が引き締まる。夏の空と夏の海。何もかも青い地球。それはいつまでも変ることなく作者の目に焼きつき、作者の心に棲みつく。今年もその夏が到来した。

裁判所前の代書屋立葵 正田 和子

法務局の前にも裁判所の前にも行政書士の事務所がある。その事務所の辺りに咲く立葵。下から咲き上つていく花で美しい。「代書屋」という言葉にはお堅いイメージがあるので、立葵は一層爽やかに感じる。

テレビでしか知らぬ戦や青嵐 新海あぐり

私も新海さんも戦後昭和二十年代の生まれ。戦時のことを聴かずじまいで父が早逝したので、私は戦争の実際を書物でしか知らない。平成の世に生まれた子なら尚更で、テレビの終戦特集などで日本がアメリカと戦争したことを初めて知る。掲出句の下五に青嵐を置いたのは、またぞろ戦が近づくその匂いを嗅ぎ取ったからだろう。

一人居は淋しい殊に春の雨 菅原 淑子

これは独り住まいをされている方にしか解らない淋しさに違いない。「殊に春の雨」の孤独感には切実なものがある。お身体お大切に。

田植機や漢一人の大舞台 杉淵真喜子

晴れ舞台といったら、やはり田植か。手で植えることがほぼ無くなり、今では田植機による田植が殆ど。石川啄木の生地である渋民村を訪れた時に補植を子どもが手

伝っているのを見たけれども、今の田植機は補植が必要ないほど田の隅々まで苗を植えることができる。その田植機を操作するのは「漢一人」。田植機に苗箱を運ぶのはその家族。一家総出の作業ながら「漢一人の大舞台」は言い得ている。実際は重労働なのだが。

山笑ふまた山笑ふ車窓かな 鈴木 智子

「山笑ふ」のリフレインにより、電車が山々に添って走っている情景を映し出す。木々の芽吹きが始まり、それまで眠っていた山々が瑞々しく目覚めた。単純な構成の句でいて、きちんと春の到来を捉えている。

すべり込む電車にセーフ新社員 鈴木 藤子

新社員の句として出色の出来栄え。遅刻したら大変と発車寸前の電車に駆け込んだ新社員。ドアの閉まるすれすれのところで無事乗車できた。それを目撃した作者は咄嗟に「セーフ」と心から喜んだ。この「電車にセーフ」の措辞が秀抜。新社員への温かな眼差しも感じる。でも飛び乗るのは危ないし、挟まったら電車が遅延するのでこれつきりにして貰いたいと。これは老婆心。

光年の先へ万緑続きをり 高橋 章子

夢のある万緑の句。希望の一句といってもいい。みど

り濃き万緑が地球のみならず、それが宇宙の果てにまで見える限り伸びてゆく。万緑にはそれだけの勢いがある。晴れやかな光景である。

風流る梢を高く鳥帰る 高橋満利子

風に乗って帰るのだろうか。地上で十分に体力をつけ梢の遥か上を飛んでいく。その群れが空に消えていくまで見送る作者。毎春のことではあるが淋しさも少し。

梅雨の月天文台のドーム照る 高橋美智子

梅雨どきの月が雲間から少し出ていて、その僅かな光が天文台のドームを照らしている。辺りはほぼ真つ暗であるので、そのドームに差す光はとても魅力的に見える筈だ。ふと目にした梅雨の月とドーム。この取合せは珍しいし、新鮮である。

マネキンのつんと上向く銀座初夏 竹森 美喜

銀座の和光？ 和光でなくとも色々のビルのショーウィンドでよく見掛けるマネキン。夏用の斬新でカラフルな衣装を身につけ颯爽としている。この句は「つんと上向く」で如何にも銀座らしいと思わせている。新宿や原宿だったらどうなのだろう。「初夏」が適切。

心底の澱ぞ抄はむ聖五月 田中 京

心底は心の奥底。心清らかな人々と接している時に、ふと自分の心に隠されている澱んだ部分に思いを馳せたのだろう。それを「抄(すく)はむ」とまで述べている。謙虚な作者である。聖五月を迎えての感慨。新たな一歩の始まる予感がする。

鬼の棲むこの世と言へり蘆茂る 寺田 幸子

鬼は邪神。邪鬼。鬼畜。自分の心の中に棲む鬼も含めこの世には鬼が多すぎる。鬼が跋扈している。正直者が馬鹿をみるこの国は、この星は、どうなる。高く茂った蘆原からこの世を覗いている作者が見える。

みながみな花筏にはなれまいに 長井 敦子

座五の「なれまいに」がいい。花筏を組める桜はほんの一握り。この句の通り、みながみな花筏にはなれない。「まいに」は長井さんらしい独特の表現。そう言えば昔、東海林太郎の歌った『むらさき小唄』に「何の苦労もあるまいに」の歌詞があつた。その「まいに」だ。芝居がかつた言葉だが、余情が感じられる。

奥つ城や星に紛れて散るさくら 中嶋きよし

奥つ城は神霊の集まる所、即ち墓所。そこに夜桜が

「星に紛れ」ながら散っているという。高木の桜なのだろう、星々の集まる夜空から降っているのだ。星々は神霊。この花びらには靈魂が宿っているのではないか。「星に紛れて散るさくら」の把握は鋭い。

貨車の音の遠く響くや夏座敷 中嶋 雅隆

襖などを取っ払い、涼気を呼ぶ夏座敷。遠くに鉄道が通っていて貨車の行き交う音がこの座敷にも響いてくる。その音も涼気なのだろう。団扇を仰ぎながら涼んでいる作者が見えるようである。

熊蜂の飛び交ふ棚の藤の色 中村 敬子

藤の花に熊蜂が飛び交う。これは誰もが知っていて既に多くの句が生まれているから、作者は工夫して「棚の藤の色」と表わしている。あくまでも藤が主役で、その色を上手く強調し印象深く仕上がった。

冷奴薬味散らさぬ箸遣ひ 中村 東子

室町時代末期から江戸時代にかけて現在の醤油に近い醤油が出来る、まだ贅沢品だった豆腐の新しい食べ方として冷奴が好まれるようになる。薬味は茗荷、生姜、大葉、花鱈、あさつき等を好みで。冷奴に盛った薬味は零れやすいが、それを散らさないように食べる見事な箸

遣いの人も居て、作者はその景に魅せられたのだ。

玉虫や遠き別れの色褪せず 中村 幹子

今年はいろいろの句会でこの玉虫を見せてもらった。
兎に角、美しい。随分前に死んだのだろうが色褪せない。掲出句の玉虫も多分そうなのだろう、玉虫に再会しての感慨が「遠き別れの色褪せず」。あらためて玉虫とその玉虫色に出合えた喜び。

行く春や一日花種集めたり 野沢 慶子

今年咲いたもろもろの花から種を採取している。乾燥させ保管し次期に備える。毎年のことながらこの一日、作者はつくづく春を惜しむ。行く春や。花種を見つつ、来年の春を今から待っているであろう。

あめんぼの水輪もちたき浮世かな 野村 雅美

浮世は生きることの苦しい世をいう。世渡りが上手い人は稀で、大方の人は世の中となんとか辻褄を合わせて生きているが、元来そういうことは不得手である。作者はあめんぼが水上に浮かび滑走しているのを見て、あの細い脚の先が作る水輪を自分も持ちたいと、あの水輪を自分も着け浮世を渡れたらと、浮世から遠ざかれたらと願っているようである。そこに共鳴する。

「物故俳人展」並びに

「高浜虚子展—生誕一五〇年—」

【期間】令和6年7月1日(月)～9月30日(月)

【開館時間】平日10時～16時、第2金曜日は19時半まで。

土日祝17時まで。

【休館日】木曜日、8月7日(水)（消毒のため）、8月9日(金)～

17日(土)（夏季休館）、9月10日(火)（全国俳句大会）

【場所】俳句文学館（3階展示室）

【展示内容】

◎「物故俳人展」は、令和5年に逝去された俳人の代表作・経歴・句集・俳誌・直筆の色紙・短冊などを展示します。

藤井青咲・黒田杏子・木村淳一郎・大石悦子・有山八洲彦・泉紫像・檜紀代・渡辺恭子・有馬ひろこ・檜山哲彦

（逝去日順・敬称略）

◎「高浜虚子展—生誕一五〇年—」は、

野を焼いて帰れば燈下母やさし
神にませばまこと美はし那智の滝

を含む俳句掛軸6点及び俳誌「ホトトギス」、句集等を展示します。

※10月は展示替のため休室します。11月から「俳人協会所蔵名品展—近現代俳句の歩み—」を展示予定です。

主催 公益社団法人 俳 人 協 会

〒169-8521 東京都新宿区百人町3-28-10
TEL 03-33367166 21(代)

※詳しくはホームページをご覧ください。